國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館　企画展

神社祭礼絵巻　―感じる雰囲気・考える現実―

会期　平成 24 年 1 月 12 日（木）～2 月 25 日（土）　※1 月 14 日（土）と日曜・祝日休館

はじめに

神社祭礼に際し組まれる行列は、古くから人々の注目を集めていた。前後に展開する祭礼行列をひとまとめに表現した絵巻は、中世のものが伝えられ、近世のものは多く残る。これらの絵巻は、実態を必ずしも忠実に反映していないこともあるが、祭礼の要点や特徴を描きあげている。今回は、本学所蔵の絵巻を展示し、それらの題材となった各地の神社祭礼の様子を紹介する。

古代から伝わる祭礼

京とその周辺の神社の祭礼は、古代以来続くものが少なからずある。特に、賀茂御祖神社（下鴨神社）・賀茂別雷神社（上賀茂神社）の賀茂祭（葵祭）や石清水八幡宮の臨時祭など、天皇の勅使が参る祭儀は重んじられ、中世後期に中断した後も、近世半ば以降相次いで復興された。これらの絵巻は、中世の行列を描いたものが写される一方で、復興時の様子も新たな題材となった。人々の関心は、祭儀で古例を再現すること、そして、復興されたものを伝えることにあったのだろう。

1　文永賀茂祭絵巻　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

絵と詞書の位置関係は同系の諸本と相違する。五摂家の鷹司家所蔵本をもとにした旨の奥書がある。その鷹司本は、賀茂祭復興がなされた元禄 7（1694）年閏 5 月下旬に、高階定信が画き、沙門旦生が詞書を記したもので、京都産業大学本、神宮文庫本と同系統。裏の継目に花押と、彩色と裏打ちの日数に関する記述がある。

2　文永賀茂祭絵巻　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

本学で教鞭をとった国文学者・武田祐吉の旧蔵。『文永賀茂祭絵巻』や、本学所蔵『賀茂祭草子』と同系。模写の時期に関する記録はない。描写された人物の人数や行列の内容は同系本と同じだが、彩色が一部省略されている。

3　石清水八幡宮臨時祭復興絵巻　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　文化 10（1813）年以降

山城の石清水八幡宮では、古代から天皇の幣帛を奉る臨時祭がおこなわれていたが永享 4（1432）年に中断する。復興は江戸後期・文化 10（1813）年のことだが、このときの様子を記録するために制作された絵巻。京から神社に向かう行列は最後に描かれており、主要な所役には官名・人名が付されている。

神輿・山車行列のはじめ

京の特色ある祭礼としては、疫病除けを旨とする夏の祇園祭もあげられる。この中では、神輿が京の町中を巡ること、そして、それに先立つ山車の一種・山鉾の巡行が、人々の関心を集めていた。神輿巡行は祭礼の中核で平安時代以来の古い由緒を持つ。山鉾巡行は京の町の人々が完成させた祭礼行列といえ、彼らの高いこころざしが反映されている。平安時代の神輿行列を模し、繰り出されない山鉾をあえて描く絵巻は、そうした祭礼の特色が反映されたものとも考えられる。

4　年中行事絵巻　國學院大學学術資料館（神道資料館）蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

祇園祭の前身である祇園御霊会の様子を描く。この御霊会では、疫病除けのために神輿渡御をおこなうが、これは平安中期にはじまった。原画成立は平安末期とされ、初期の渡御の様子をとどめているものと考えられる、展示の絵巻は、江戸前期の最古の模本より省略部は多いが、彩色が施されているところに特徴がある。

5　祇園祭礼絵巻　國學院大學学術資料館（神道資料館）蔵　巻子本　1 軸　絹本着色　嘉永元（1848）年　冷泉為恭画

嘉永元（1848）年の山鉾を巡行順に描いたものと見られ、曳鉾姿の綾傘鉾や、元治元（1864）年の大火以降休山となった大船鉾もある。さらに、当時休山中の鷹山も描かれており、示されているのは江戸期の山鉾のあるべき姿といえる。粽を山鉾から投げている人々の姿もあるが、現在粽投げは巡行の際には行われない。

京のまつり

京都の祭礼では、葵祭や祇園祭が有名であるが、その他にも、数多くの祭りがおこなわれている。ここでは、その中から、4 月〜5 月にかけて神輿の渡御がおこなわれる、伏見稲荷大社・御霊神社（上御霊神社）・下御霊神社の祭礼などをとりあげる。その中の一式、伏見稲荷大社の祭礼は、その期間が長く、4 月 20 日前後の日曜日に神輿を御旅所にうつし（神幸祭〈おいで〉）、お戻り（還幸祭）になるのは 5 月 3 日のことである。

6　稲荷神社両御霊神社私祭之図　國學院大學学術資料館（神道資料館）蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　明治 10（1877）年　国井応文画

伏見稲荷大社、両御霊神社（上御霊神社、下御霊神社）の祭礼に際して、御輿が渡御する様子を描く。両御霊神社の行列には、剣鉾がみえる。剣鉾は京都を中心とする祭礼にみえる祭具である。

7　佐賀祭絵巻　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

嵯峨祭を意識して描いたものと考えられる。同祭礼を描いた絵巻としては、チェスター・ビーティー・ライブラリー（アイルランド）所蔵の「嵯峨祭絵巻」がある。同絵巻とは共通する練り物はみられるが、本絵巻には剣鉾がみられないなど異なる部分も多い。

日光東照宮の祭礼

徳川家康をまつる日光の東照宮（日光市）は、子の秀忠によって創建され、その命日に当たる 4 月 17 日（旧暦）に、将軍が主宰する祭祀が毎年おこなわれていた点で、他の東照宮とは一線を画す。その時に組まれる行列は、3 基の神輿を中心に、数多くの人々が威儀を正して付き従う。世に「千人行列」と呼ばれたこの行列は、武家社会における神輿行列の典型といえ、絵巻の中には、所役構成などに注意し、描写対象を絞ったものも存在する。

8　日光祭礼絵巻　國學院大學学術資料館（神道資料館）蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

日光の東照宮における 4 月御祭礼の神輿行列を描く。行列の前後と中間の一部を欠くものの、東照大権現（徳川家康）・山王・摩多羅神あわせて 3 基の神輿の部分はある。屋根の紋や四方正面の屏障の有無など、各神輿の相違点は明確に描き分けられている。ただし、参加者の所持具の描写を疑問視する書き込みがある。

9　東照宮御祭礼絵巻　國學院大學学術資料館（神道資料館）蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　嘉永 4（1851）年

『日光祭礼絵巻』と同じく、日光東照宮の神輿行列の図。多人数の所役を 1 人の人物で代表したかのような描写も多いが、行列次第の流れには忠実で、全体像を把握することができる。描かれた 3 基の神輿には、東照宮の宝物館に現存する寛永 12（1635）年製の神輿の特徴が、意外によくあらわれている。

和歌祭

和歌祭は、紀州東照宮（和歌山市）の祭礼である。東照宮は全国各地に鎮座するが、この東照宮は、徳川家康の子である頼宣（初代紀州藩主）によって、元和 7（1621）年、和歌浦に創建され、祭礼は同 8 年よりはじめられた。この祭礼には、多くの練り物がでた。寛文 5（1665）年に頼宣が縮小を命じたため、祭礼行列は縮小したが、近世後期には再び盛大なものとなった。明治以後は、中断と再興を繰り返しつつも、現在では 5 月に行われている。

10　和歌御祭礼絵図　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　江戸後期　勝川春英画

寛文 5（1665）年に縮小される前の練り物が描かれるが、風俗考証から当時の様子をそのまま描いたものではないと考えられる。付属の文書には勝川春英が描いたものとあり、同じく春英が描いた『和歌御祭礼御絵図』（下）（個人蔵）と関連する可能性がある。

11　紀州東照宮祭礼絵巻　國學院大學学術資料館（神道資料館）蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　江戸後期

復興された餅つき踊りが描かれる一方で、相撲取りが見えないことから、寛政 12（1800）年から文政 4（1821）年にかけた時期の和歌祭を描いたものとされる。餅つき踊りは、寛政 12 年に、和歌山城下における出版事業の中心人物であった高市志友によって再興されたものである。

各地の神社祭礼

神社は鎮座する地に根ざして存立しており、そこでおこなわれる祭礼もまた、神社の個性ともいうべき特色が見られるものである。祭礼行列は、その特色を端的に示すものだが、他方で、物的・人的面での周到な準備を伴うものでもある。実際、特色ある行列を組む祭礼は、神社の中で極めて重要なものであることが多い。逆をいえば、祭礼行列は、神社の由緒をはじめ、関わる人々の役割や、存立基盤などを一つ所に示す場なのでもある。

12　阿蘇宮祭礼絵詞　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

阿蘇神社で行われる御田祭りの様子を描く。行列の様子には白い装束を着て、頭に櫃をいただく「うなり」、田男人形、田女人形、牛の面などがみえる。また、馬を走らせる泥打ちの様子も描かれている。泥打ちは、現在行われていない。

13　宇佐御祓図　國學院大學図書館蔵　巻子本　1 軸　紙本着色　制作年代不詳

宇佐八幡宮（豊前・今の大分県）で行われていた御祓会の神幸行列の概略を描いた絵巻。大祓と同様 6 月末に行われた。平安時代以来の夏の祓の道具・菅貫（菅抜）など、祓を特徴づける持ち物を持った人物は前方に描かれている。